

Ⅳ-151

P-Fテストの考え方を活用した個人的潜在意識の把握と合意形成手法

福山コンサルタント 正会員 伊藤 将司
同上 正会員 柴田 貴徳

1. 本研究の枠組みと本稿の目的

人間は、きわめて高い潜在的能力を持つことはよく知られたところである。通常の場合、合意形成や計画参加などの概念は、人間の顕在化した能力によって、互いに意見の調整を行い、ある一定の妥協点を探るという行為を指す。しかしながら、個々人が「望ましい」と感じる「都市のあり様」は、どちらかといえば、個々人の生理に近い感覚であるため、決して顕在化した能力によって示される論理的・言語的手段によって明確にされ得るものではなく、したがって、互いの「感じのいい都市」を目指していくまちづくりにおいては、潜在的能力の助けを借りた、イメージの共有化を進めることが必要となるのではないかと筆者らは考えている。さらに、潜在的能力は、イメージされた事柄を実現していくシステムであるため、ひとつの市民集団がある「感じのいい都市」のイメージを共有化し得たとした場合、個々人の顕在能力の動向とは無関係に、その共有化されたイメージの実現に向けて、集団としての潜在能力が働くのではないかと考えられるのである。そこで求められるのは、個々人がある対象について、潜在意識レベルで、どのような感じをもっているのかについての把握と、それを踏み台としたイメージの共有化（＝合意形成）である。

本稿では、その実験的試みとして、比較的なじみがあり、また、イメージの湧きやすい街区公園の整備を取り上げ、市民のもつ潜在意識レベルでの評価の把握と合意形成手法について具体的な提起を行う。

なお、ここで取り扱う潜在意識は、ユングのいう個人的潜在意識（無意識）と集合的潜在意識（無意識）のうち、心理学の世界でその顕在化の手法が確立されている、個人的潜在意識とする。

2. P-Fテストについて

フロイトによれば、人間の本性（個人的潜在意識）は、「自我」という合理的な意識として形成された、現実生活のさまざまな要因によって抑制されている。

キーワード：市民参加、潜在意識、合意形成

〒136 東京都江東区亀戸2-25-14

〒802 北九州市小倉北区片野新町1-11-4

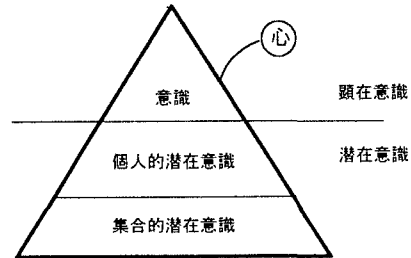


図-1 ユングによる心の構造

その「自我」はさらに、家庭や社会的拘束によって自分で自分を監視する「超自我」を形成している。本稿では、「自我」と「超自我」の両者とも個人的潜在意識を抑制している意識と認識し、両者を一体と考え明確な区別はしない。

さて、個人的潜在意識の把握の方法として、本研究では、P-Fテストの考え方を活用する。

P-Fテストとは「Picture Frustration Test」の略で、かつては絵画欲求不満テストと呼ばれていた。これはローゼンツアイク（精神医学者）により考案された手法で、本来は人格検査等に用いられる。P-Fテストの特徴は、線画を用いて潜在意識に、ある事象に対する刺激をやわらかく与えるため、回答者のありのままの気持ちが反映できることにある。具体的には線画を用いた絵（左側の話かけている人物が右側の人物に何らかの意味で不満を起こさせる場面）（図-3）を表示することにより、回答者の潜在意識にある欲求不満を導き出す。そして、その回答を人為的、非人為的障害で直接「自我」が阻害されて欲求不満を引き起こした場面（自我阻害場面）と、誰か他のものから詰問され、「超自我」が阻害されて欲求不満を招いた場面（超自我阻害場面）に分類し、これらの場面ごとに得られた結果に細かく点数をつけていくことにより評価していくものである。

3. P-Fテストを活用した個人的潜在意識の把握と合意形成手法

本研究ではP-Fテストによる厳密な調査解析を

tel:03-3683-0151

fax:03-3683-0196

tel:093-931-3101

fax:093-951-8660

行うことが目的ではなく、あくまでその考え方を活用して、市民の潜在意識を把握することである。

従来の合意形成とは、検討すべきいくつかの項目に対して、どの項目が評価できるのかを、多数決や話し合い等の方法で探り、それをベースに集約を図るというものであるが、その際、YESと評価をしている項目についても、本当に納得している人、非常に気に入っている訳ではないけれど概ねこの方向でいいと思っている人、強いリーダーシップに押されてなんとなく賛成をした人等の様々なタイプのYESがあるものと推測される。そして、ほとんどの場合、これらの心理状態を深く検討することなく、すべてYESとして判断されていると推測される。

筆者らはその選択項目に対して、P-Fテストの考え方を活用することにより、個人的潜在的意識において、検討項目のどこが評価でき、どこに不満を感じているのかということを明確にするを試みる。そして、その評価を潜在意識レベルでの議論に委ね、合意形成を図って行こうとするものである。

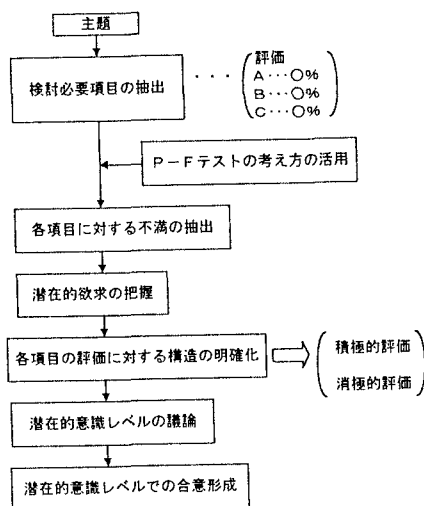


図2 個人的潜在意識の合意形成の手法

4. ケーススタディの進め方

上記の手法を用いて公園整備をケーススタディとして検証する。

対象となる公園は、首都圏に位置するN町（人口約3万人）の既成市街地内にある。地形は平坦であり、現在は整地され、全くの更地である。また、近くに河川・水路等の水系は無い。所有権は町にある。

ケーススタディの進め方は次の通りである。まず、周辺住民にアンケート調査を実施し、どのような公園がほしいのかということを把握した上で、その内

容を何項目かに整理する。つぎに、それらの項目を対象にしてP-Fテストの考えを基本とした調査を行う。この調査では住民の方々にそれぞれ同じ絵（図-3）を項目別に見てもらい、空白の部分に自分が感じたことを埋めてもらう。そして、その空白部分を分析し、潜在意識レベルでどのような不満があるのかを導き出す。これらの結果をもとに、整備コンセプト、整備構想図を作成し、再度住民の方々に投げかけ意見をもらう。その際、潜在意識レベルで出た矛盾点を議論のテーブルにのせ合意形成を図るとともに、どこを修正、改善していけばより満足のいく合意が得られるかを検討する。それらを経て、最終的な計画案を策定するというのである。ケーススタディの結果は、学会の席上発表したい。

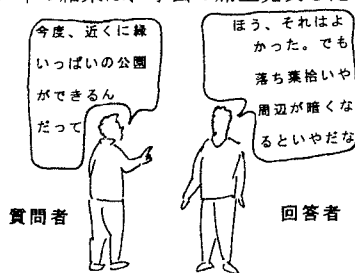


図-3 P-Fテストの線画

5. P-Fテストの考え方を活用することによって期待できる効果

P-Fテストの考え方を活用することによって、参加するすべての住民の潜在意識に基づく意見が収集できる。そして、合意形成に至った場合には、曖昧な合意形成ではなく、個人の本当に望む内容による合意形成、個人的潜在意識に委ねた合意形成であるといえる。

6. 今後の研究方針

本稿では、市民に身近な公園整備を対象とした個人的潜在意識の把握と共有化をテーマとしているが、これを他の都市施設や事業手法あるいは規制制度に拡張し、それぞれについて同様のアプローチを試みると同時に、それらを総合化することにより、「感じのいい都市」のもつ内容を明確にする。その上で、その実現に向けての潜在意識レベルでのイメージの共有化手法について、さらに研究を進めたいと考えている。

（参考文献）

- 「心理学」 星忠通、他共著 巖波堂書店
「こころの科学」 安藤公平、他共著 駿河台出版